



TITLE:

啓蒙と旅行記

AUTHOR(S):

阪上, 孝

CITATION:

阪上, 孝. 啓蒙と旅行記. 人文學報 2000, 83: 227-246

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48539>

RIGHT:

啓 蒙 と 旅 行 記

阪 上 孝

- 1 「世界という書物」
- 2 旅行の指針 ― 観察の技法
- 3 『エジプト・シリア紀行』
- 4 外部世界の消滅

1 「世界という書物」

「人間」を知ることが啓蒙の知識人の重大な関心事であった。そして人間を知るためには、自分の生まれ育った国とは別の国々の人々の習俗や他の諸国民の「一般精神」を知ること、要するに人間とその社会の多様性を知ることが不可欠だと考えられた。ルソーは書いている。「私は、ある人民しか見たことのない者は、人間を知っているどころか、彼がいっしょに暮らした人々しか知っていないということを、異論の余地のない格率だと考える。」(『エミール』237ページ) こうして〈外部への関心〉が彼らを強く捉えることになる。

旅行記を読むことは、彼らの〈外部への関心〉を満たすもっとも手っ取り早い手段であった。この時代には多数の旅行記が出版されるが、ペルシャ、中国、アメリカ大陸などの旅行記は彼らの愛読書であった。ヴォルテールの3867タイトルの蔵書中に133タイトルの旅行記関係の文献がふくまれている(Duchet, M. p.68-69) が、これらの旅行記を読むことなしにはヴォルテールは『習俗論』を書きえなかったであろう。モンテスキューは『法の精神』の執筆にあたって、シャルダンのペルシャ旅行記やデュ・アルド師の『シナ帝国全誌』など多数の旅行記をノートを取りながら読んだ。(Dodds, p.175-290) ルソーも「私は一生旅行記を読んできた」と書いた。(『エミール』237ページ)

旅行記は、世界にはヨーロッパ人とはまったく異なる習俗をもつ人々、法や制度のまったく異なる未知の社会が多数存在することを教えた。とりわけ、ラオンタン『ラオンタン男爵とアメリカ未開人の対話』(1705年)、シャルダンの『勲爵士シャルダンのペルシャと東方諸地域への旅』(1711年)、34巻からなる『イエズス会士書簡集』(1702-1776年)、アベ・プレヴォ編の20巻の『旅行記集成』⁽¹⁾(1746-1802年)、ブーガンヴィル『世界周航記』(1771年)は、啓蒙の

時代の外部世界の表象の形成に寄与した代表的な作品である。

旅行記が伝える人間とその社会の多様性をいかに考えるべきなのか。この問題は啓蒙の知識人の直面した大きな問題であった。ビュフォンは人類単一起源説をとり、人類のさまざまな変種は風土、食物、習俗の相違から生まれると考えた。それにたいしてヴォルテールは、人類多起源説の立場から「白人、黒人、ホッテントット人、ラップ人、シナ人、アメリカ人がまったく別の人種であることを疑うことは盲人にしか許されない」(Voltaire, p. 6) と書いた。法の基礎をなす習俗、国民精神に焦点をあてながら、この問題を考えるための理論を提出したのはモンテスキューである。モンテスキューは書いている。「私はまず人間を研究した。そしてこの習俗と法の無限の多様性のなかにあって、人間はただその気紛れだけから行動しているわけではないと考えた。私はいくつかの原理を措定した。すると、個々の場合はいわばおのずからこれらの原理にしたがうことがわかった。」(『法の精神』序文) モンテスキューの「原理」の要点は、風土→人間(身体→精神)→生活様式・習俗→国民の一般精神→法という規定関係を措定することによって、人間とその社会の多様性の説明することにあつた。モンテスキューは、自然的原因にたいする精神的原因の反作用あるいは優越を説いた文章を数多く記していることからわかるように、単純な風土決定論を主張したのではない。しかし文化にたいする風土の影響を重視するモンテスキューの理論は、人間とその社会の多様性を説明する有力な原理であった。この理論は、賛同するにせよ批判するにせよ、モンテスキューに続く世代の知識人たちがヨーロッパの外部世界の異質性・多様性を考えるさいの基本的な枠組みになる。

しかし旅行記がよく読まれるようになるとともに、旅行記にたいする不満・批判も強まる。一方では、旅行記がふくむ誇張、虚構が批判される。旅行家と旅行記の読者のあいだには、一方が驚くべき新奇なことがらを伝え、他方はそれにたいして賞賛を与えるという默契が成立している。(Volney, p.184) 物語の新奇さのみが読者の関心を引き評価されるのである。この默契にもとづいて、旅行家は彼が見たものを誇張し、見なかったものを付け加えるのだ。「旅行家たちはほとんどいつも、彼らが見たものに、見ることができたであろうものを付け加える。そして彼らは旅行記を不完全なままにしておかないために、さまざまな著者たちから読んだことを報告する。彼らはまず騙され、ついで自分が騙されたのと同じように読者を騙すのだ。」(voyageur, *Encyclopédie*) こうした読者うけを狙う意図が記述をゆがめるだけではない。むしろ異国の新奇な事物の印象に圧倒されて、意図せずに対象をゆがめ誇張する場合のほうが多いであろう。いずれにしても旅行記には誇張がつきものなのだ。他方では、旅行家の多くは自分の育った国の偏見や習慣に囚われているために、それに合わせて異国の習俗や社会を判断する。その結果、彼らは世界の果てまで行っても自国のことしか語らない。「三、四〇〇年このかた、ヨーロッパの住人が世界のほかの部分に流れ込み、新しく集めた旅行記や報告をたえず出版しているが、われわれは人間についてヨーロッパ人しか知らないのだと私は確信している。」

（『人間不平等起源論』280ページ）要するにこれまで出版されたほとんどの旅行記には客観性が欠けているのだ。

もっと重要なことは、旅行記を読むことで「世界という書物」を読んだ気になる、あるいは忘れてしまうことである。「読んだことは知っているのだと信じて、人は、それを学ばないでもよくなったのだと信じる。……ヨーロッパのあらゆる国のなかで、フランスほど、歴史、見聞記、紀行が多く印刷される国はなく、人々が他の国民の精神や習俗を知らない国はない。書物が多すぎることで私たちに世界という書物のことを忘れさせ、あるいは、この書物を読みはしていても、一人一人自分のページしか見ようとしない。」（『エミール』309-310ページ）

だから、旅行記を読むよりも「世界という書物」を直接に読むこと、つまり旅に出てさまざまな人間と社会を直接に観察するほうが有益である。「私の観察しえたわずかばかりのことで私の読んだことを比較して、とうとう私は旅行家たちをほうりだし、彼らを読んでなにかを学ぼうとして時間を費やしたことを残念に思った。どんな種類であろうと、観察というかぎり、読むべきではなく、見るべきであると確信するようになったからである。」（『エミール』310ページ）

旅行が習俗の多様性を知り、人間を知るための有効な手段であることは以前から言われていた。モンテーニュはギュルソン伯爵夫人に、子供を「個々の国民性とか、風習とかを調べ、そうしてわれわれの脳味噌を他人のそれにこすり合わせ、磨くことを目的とする」（『エッセー』、I-26）外国旅行に行かせることを勧めた。習慣はいったん根をおろすと、「われわれにはもうそれにたいして目を上げる自由さえもない」（『エッセー』、I-23）ほどの支配力をもち、他の人々の習慣を奇怪で不条理なものに見なさせる。それにたいして、外国旅行は他国の習慣を見ることによって、この支配力から自由になる道を開くからである。「心は旅のなかでたえず未知の新しい事物に注目する訓練を受ける。何度も述べたように、他の生活や幻想や風習の多様性をたえず、心に示し、われわれの本性の絶え間のない変容を味わわせることほどよい学校を私はまったく知らない。」（Ⅲ-9）デカルトも旅の効用を説いた。「旅に出て、種々ちがった国民の習俗のいくらかを知ることは、われわれ自身の習俗についていっそう健全な判断を下すためにも、また物を見たことのない人がよく考えるように、われわれのやり方に反することはすべて滑稽で理性に反している等と思わぬようになるためにも、有益である。」（『方法序説』、167ページ）もっともデカルトは、過去の歴史に熱中しすぎると現代について無知になるのと同じように、旅に時間を費やしすぎると自分の国で他国者になってしまうと戒めたけれども。

じっさい、啓蒙の知識人の多くは、自発的にせよ強いられたにせよ、旅に出た。ヴォルテールは1726年にロアンと決闘騒ぎを起こしてイギリスに渡り、その後もベルリンやポツダムに旅をした。モンテスキューはボルドーとパリのあいだを頻繁に往復し、1728年にはイタリア、オーストリア、オランダ、イギリスをめぐる三年間のヨーロッパ旅行に出た。ルソーの生涯は、強

いられた旅も含めて、旅行の連続だった。古典主義の時代から啓蒙の時代への移行を「静から動へ」と特徴づけたポール・アザールは書いている。パリから300キロメートル離れた「ブルボン温泉へ行ったとき、ボアロは世界の涯まで来たような気がした。オートゥイユだけでこと足りていたからだ。ラシーヌもパリだけで満足していた。……そう言えば、ボシュエは生涯ローマへ行かなかった。フェヌロンも行かなかった。……古典主義の大作家たちは動くのが嫌いだったのだ。あっちへ行ったりこっちへ行ったりするのは、ヴォルテール、モンテスキュー、ルソーといった連中である。」(アザール、12ページ)

旅行記を読むよりも旅に出るほうが有益だとしても、人間を知るうえで真に有益な旅をするためには、人間と社会を観察し、そこから人間についての知識を生み出すのに必要な哲学を身につけることが必要である。「最近、人々は歴史の哲学を作り出したのだから、どうしていつの日か旅行の哲学も作り出しえないであろうか。」(Histoire des voyages, t.18, p.vii) こうしてこのような哲学を身につけた〈哲学者＝旅行家〉の登場が要請される。ルソーは、船乗りや商人や兵士や宣教師のようなこれまでの旅行者でなく、〈哲学者＝旅行家〉が「国民の偏見の束縛をふるい落とし、人間をその一致点と相違点で知ることを学ぶ」ために世界を旅行し旅行記を書くことこそ、人間の認識に飛躍的な進歩をもたらす契機だと書いた。彼らの書く旅行記は「政治と倫理の博物誌」であり、彼らの旅行記によって、「われわれは一つの新しい世界が出てくるのを見、世界を知ること学ぶであろう。」(『不平等論』282ページ)

ルソーがこう書いてから10年あまりのちに、ブーガンヴィルが世界周航に旅立ち、〈哲学者＝旅行者〉として『世界周航記』を書いた⁽²⁾。ここで取り上げるヴォルネー⁽³⁾(1757-1820)はもっと自覚的に〈哲学者＝旅行者〉としてオリエント旅行に出発し、「政治と倫理の博物誌」を書こうと試みるであろう。

2 旅行の指針 ― 観察の技法

一八世紀に入ると、以前よりもはるかに多くの人々、さまざまな階層の人々が旅に出るようになる。経済学者のタッカーは『旅行者への指針』(1757年)のなかで、旅行者を旅行の目的にしたがっていくつかのカテゴリーに分類している。博物学者のような珍しい物品の収集者、絵画、建築、音楽などの技術向上を目指す者、有徳な人物という評価を得ることを目的とする者、外国の新しいファッションで身を飾ることを望む者、人間と事物にたいする広く公平な見方を身につけることを目的とする者、そしてイタリア、ギリシャに出かける古典賛美者である。(Tucker, p. 3) タッカーの分類は旅行者の範囲がいちじるしく広がっていることを示している。

旅行者の範囲が広がるにつれて、旅行の指針書がいくつも書かれることになる。これらの指

針は、旅の仕方と旅行を有益にするためにはいかなる知識を習得しておくべきかを指示するものだった。「無知な旅行者はもっとも軽蔑すべき存在だ」（Tucker, p. 4）からである。旅行にはさまざまな目的があり、それぞれにふさわしい指針がある。タッカーの『旅行者への指針』は将来の立法者を対象としていた。彼らには、ヨーロッパ諸国の宗教、法と政体、権力の状態、通商と租税などを知ることが重要であり、そのためには旅行に先立って読んでおくべき書物がある。タッカーは、バーラマキ『自然法と政治法』、モンテスキュー『法の精神』、ウォーバートン『協会と国家の同盟』、キャンベル『ヨーロッパの現状』などを読んでおくことを勧めている。さらに彼らにとってはヨーロッパ諸国とイギリスを比較することがとくに重要だから、イギリスの現状について確実な知識を身につけておくことが求められる。（Tucker, p. 6）

ディドロも『オランダ旅行』（1774年）の序論として「有益に旅する手段」を書いた。判断力と必要な知識をもっていなければ旅行から何も得られないから、旅行に先立って、博物学、地理学、語学、歴史を習得しておくことが必要である。有益な観察を行なうには「観察の精神」を身につけておくことが必要であり、また習俗を観察するためには、都市よりもそれが純粋な形で見られる農村を旅すべきである。もっと実際の指針として、ディドロは「多くを聞き、少なくしゃべること」、地勢や戸数や人口の概観を得るために、町につくと高いところに登って町を眺める⁽⁴⁾ことを勧めている。（Diderot, p.367）

これらの指針は「グランド・ツアー」風の自己教育のための旅行向けの指針だが、この時代になると、それとは別の旅行——科学的調査を目的とする旅行——の重要性が増してくる。モーペルチュイはフリードリッヒ二世にあてて「科学の進歩にかんする書簡」（1752年）を提出して、「人類にとって有益で、学者にとって興味深い研究」として、「南の大陸」の発見と南米の巨人族と伝えられているパタゴン人の調査を目的とする探検隊の派遣を進言した。（Martin-Allanic, p.30-32）モーペルチュイの提言は容れられなかったが、その後、デンマーク王室の援助によるニープールらのアラビア探検（1761-1764）、ブーガンヴィル（1766-1769）、クック（1769-1771）、ラ・ペルーズ（1791）の世界周航などの科学的旅行が相次いだ。これらの探検のすべてが学術調査のみを目的としていたわけではなかったし、調査においても人間と社会よりも地理や動植物の調査が主な目的であった。しかし探検家たちが出会った未開人の習俗と社会は彼らの関心を強く捉えた。ブーガンヴィルはタヒチの人々の習俗を記述し、そこからディドロの『ブーガンヴィル旅行記補遺』のような外部世界の表象が生み出された。

科学的な探検には、個人の自己教育の旅行にもまして、それにふさわしい方法論が必要である。ブーガンヴィルの世界周航に随行するにあたって、植物学者のコメルソンは「博物誌の観察の概要」をこの探検の責任者である海軍卿のフララン公に提出した。もっともこの観察計画はコメルソン自身、計画通りに実行できると考えてはいなかったし、植民地獲得と貿易独占を重要な目的とするこの探検の性格からしても副次的なものにならざるをえなかった。（Martin-

Allanic, p.472)

科学的調査のための指針をまとめたのは、アラビア探検をデンマーク政府に提案した神学者・東洋学者のミハエリスである。ミハエリスはこの探検によって、聖書に言及されている動植物、アラビアの地理、アラブ人の習慣と言語などを調査して聖書の言語学的分析を前進させることを期待して、言語学、動植物学、地理学の専門家を隊員に選んだ。彼の構想からすれば、言語の習得が探検の成功の第一条件であることはいまでもない。さらに、この探検の目的は体系的で組織的な調査にあるから、観察を「旅行家の好奇心と選択にまかせる」のでなく、明らかにしようとする対象を正確に規定する項目にしたがって行なわせることが必要である。「旅行を真に有益なものにするためには、旅行家に質問表を提示して、心構えをさせなければならない。」ミハエリスはこう考えて、ヨーロッパの学者たちにも協力を求め、およそ千項目の質問表を作成する。(Moravia, pp.970-973) 質問表の作成とそれにもとづく調査という方法は、その後の科学的調査の旅行のモデルになるであろう。ヴォルネー『旅行者用統計質問表』(1795年)、ボードン船長による世界探検にさいして書かれたジェランドー『未開人の観察においてしたがうべき方法』(1800年)は、この方法の展開を示している。

自己教育の旅においても科学的探検においても、旅行から人間とその社会についての認識を生み出すための鍵だと考えられたのは「観察」である。真理の認識にかんして、啓蒙の知識人は観察に特権的な地位を与えた。カバニスは臨床医学における観察の意義について書いている。「観察はわれわれにさまざまな病気のあいだにある相違を教える。観察は、この相違があらゆる自然現象と同じく一定の法則にしたがっており、病気が生体に引き起こす変化が過去ないし現在の一定の事実と規則的な関係をもっていることを教える。……観察はこの知識を確定された諸規則に帰着させ、方法によってもっと正確なものにすることができる。」(Cabanis, t.1, p.66) 要するに、観察はさまざまな事実を正確に見ることによって、それらがふくんでいる真理を事実そのものによって語らせる技術なのである。

しかし観察が事実その真理を語らせるには、二つの困難な条件を満たさなければならない。まず第一に、観察は対象をゆがめることなしに、あるがままに捉えなければならない。そしてそのためには、偏見や既成の体系や想像力など、その障碍になるものの介入をすべて排除しなければならない。これは人間と社会の観察にとって、とりわけヨーロッパとは異なる習俗と社会の観察にとって重要な条件だが、同時にきわめてむずかしい条件でもある。「われわれの判断は、対象の現実の性質よりもわれわれが見ることによって受け取る感情に左右される。……そのうえ、最初の習慣からくる偏見は逃れがたいほどである。」(Volney, p.181)

偏見や感情から自由な眼で観察するとして、それでは何を観察すればよいのか。コンディヤックやカバニスらによって精緻化された認識論によれば、観察は対象の分解と再構成の二つの過程からなるとされた。すなわち、観察によって対象を認識するには、まず対象をその構成諸要

素に分解してそれぞれの要素をつぶさに観察し、ついでそれらの諸要素を結合して対象を再構成することが必要である。時計の構造を認識するには、時計を分解して歯車やバネなどの部品の働きを知り、ついでそれらを時計に組み立て直すことが必要なのである。したがって、まず対象を諸要素に分解しなければならないが、同時にそこから非本質的なものを除去して、本質的な諸要素を抽出しなければならない。金鉱石から金を抽出しようとするれば、鉱石から不純物を除去しなければならないのと同じである。さきにふれた質問表は対象の諸要素への分解の手続きにほかならない。そして観察された諸要素は一覧表の形でまとめられるであろう。ところで、本質的な要素を抽出するには、先の第一の条件とは反対に、前もって何が本質的かを教える理論が必要である。ヴォルネーは「うまく質問するためには、質問が目指す対象の観念をすでもっていないなければならない」（Volney, 1795, p.663）と述べて、質問を導く理論の必要を説いたが、同じことが見ることにあてはまる。したがって、見ることは「対象にたいする問題設定の内的な反射」（Althusser, p.27）なのである。

ついで、観察が個々の要素の認識だけでなく諸要素の関係を明らかにすることによって対象の認識を生み出すためには、観察された諸要素を積み重ね有機的に結合して、対象の全体の再構成に向かわなければならない。「諸事実を哲学的精神によって適切な秩序で配列しなければ、無数の事実のなかで道に迷うことになるだろう。」（Cabanis, t.2, p.68）このようにして対象が再構成されたとき、観察は、だれにでも見えていたが、だれも見なかったものを語るであろう。そのとき事実とは、それが含む真理を自分自身で語るであろう。対象の諸要素への分解とそれらの関係づけによる再構成、これがこの時代に練り上げられた観察にもとづく認識論であった。

だから観察はけっして単に見ることではない。それは、見ることに先立ち対象をあるがままに見ることを妨げる一切のものを禁じて見ることに、また見たものの印象に抗して見ることである。それはさらに、対象の分解と再構成を可能にするような仕方で見ることである。だから観察には、多くの理論的および実践的な訓練が必要である。観察は「人が考える以上に多くの訓練を要する技術」（Volney, p.13）なのだ。ヴォルネーは徹底して観察者の立場から『シリア・エジプト紀行』（以下『紀行』と略記する）を書こうとした。じっさい彼は『紀行』で、強迫観念のように「私は観察した」、「多くの観察すべきことが残っている」とくりかえしている。彼がオリエント旅行で何をいかに観察するかを見よう。

3 『エジプト・シリア紀行』

『エジプト・シリア紀行』の序文によれば、ヴォルネーがオリエント旅行を計画したのは1781年、24歳のときである。相続した母の遺産をどう使うかを考えた末に、「精神を豊かにし

判断力を養う」のに有益な旅行に出かけることを決心する。なぜオリエントかといえば、一つには、この地域が「われわれを支配する意見の大部分が生まれ、われわれの公的および私的な道徳、法律、社会状態にきわめて強い影響を及ぼした宗教的観念が生まれた」(Volney, p.11-12) 地だからであり、もう一つはオスマン帝国の状況がヴォルネーの政治的関心と呼んだからである。

オリエントは18世紀のヨーロッパ、とりわけフランスの知識人の関心を呼び、想像力をかき立てた。前世紀末に刊行された『オリエント叢書』、『千夜一夜物語』の翻訳・出版(1704-1717年)、1660年から1740年の間におよそ150点も刊行されたアジア旅行記、モンテスキュー『ペルシャ人の手紙』(1721年)、ヴォルテール『マホメット』(1742年)などが人々のオリエントにたいする興味を呼び覚ました。これらの作品がエキゾチズムをかき立てたのにたいして、『法』(1748年)はオリエントの政体への関心を生み出した。さらに、東洋の専制を風土にもとづけるモンテスキューにたいして、ブーランジェは道徳的および政治的要因の重要性を主張した。「アジアの土壌の性質と気温を隷属の唯一の原因と見なすことは、隷属に力を貸した無数の道徳的および政治的原因を犠牲にして、自然的原因にすべてを与えることである。……風土が地上のさまざまな住民にたいしてもつ力がどれほどのものであるにせよ、われわれはたとえばつぎのことを確信することができる。すなわち、教育と偏見が子供のときから幸福と義務にかんする間違った原理を提示することがなければ、自分のもっとも貴重な利害についての自然的な感情を人間から消してしまうことのできるような自然の活動は存在しない、ということである。」(Boulanger, p. 9) こうしてブーランジェは専制の原因を政治権力と宗教の共謀に見出し、その展開を論理的に跡づけた。専制は神政政治の「悲しむべき結果であり、ほとんど自然的な帰結」(Boulanger, p.13) だとして、専制政体における宗教の役割を重視するブーランジェの著書は、ヴォルネーにオリエントでの観察の基本的な視角を与えたであろう。

そのうへ、ヴォルネーがオリエント旅行を考えた時期には、オスマン帝国の現状がフランス政界の関心を集めていた。オスマン帝国の瓦解が近いことが予測されるなかで、その支配下にあるエジプトを奪取すべきだと主張するサルティエヌ海軍卿と、オスマン帝国との友好関係を保持し、その領土の保全を主張するヴェルジェンヌ外務卿が対立していたのである。ヴォルネーの伝記を書いたゴーミエは、こうした状況を背景にヴェルジェンヌが自分の主張を根拠づけるためにヴォルネーを派遣したのではないかと推測している。(Gaulmier, p.33-40) たしかに、ヴォルネーはマムルークの軍隊やエジプトの軍事施設などを詳細に観察しているし、1788年には『露土戦争にかんする考察』を著わしてフランスの外交政策にかんする提言を行なっているから、ゴーミエの推測が成り立たないわけではない。

オリエント旅行を企ててから、ヴォルネーはそのための準備を重ねた。コレージュ・ロワイヤルでアラブ語を学び、ヘロドトス、ストラボン、ホメロス、プリニウスなどの古典、アラブ

の歴史家たちの歴史書、シカールやアンヴィルのエジプト・シリアの地図、この地を旅した旅行家たちの旅行記を読んで、オリエントにかんする知識の蓄積につとめた。もっとも、これらの書物から得た知識は、ヨーロッパとはまったく異なるエジプトの圧倒的な印象を前にして、あまり役立たなかったようだ。「歴史や旅行記を読んできたが無駄であった。それらの記述をもとにして地形や都市の町並や衣服や住民の生活様式を心に描こうとしたが無駄であった。」（Volney, p.15）他方では、徒歩旅行のための訓練や乗馬の練習など身体の訓練を重ねた。

こうした準備ののちに、ヴォルネーは1782年12月にオリエントに向かって出発する。しかし彼は、同時代の多くの旅行家がしたように、『紀行』をこの地の風物の絵画的な描写や個人的な冒険譚に仕上げるつもりはなかった。「この作品の形式についていえば、私は旅行記の通常の方法にはまったく従わなかった。旅程の順序とその細目、個人的な冒険は、あまりに長くなるので除いた。私は全般的一覧表によってのみ論じたのである。」（Volney, p.14）じっさい『紀行』には到着の日時や移動の旅程⁽⁵⁾などはまったく記されていない。そこにあるのは、エジプトとシリアの自然的状態と政治的状态について観察された事実とそれにもとづく推論だけである。ヴォルネーは『紀行』を事実の観察にもとづいて、エジプト・シリアの現状、具体的にいえば、専制の作動の様式、それが住民の道徳的状态に及ぼす影響の認識をもたらす著作として書こうとしたのである。

たしかにエジプト・シリアのヨーロッパとは対照的な風物や住民の生活習慣、古代の遺跡などは旅行者の心を奪い、エキゾチシズムにかきたてる地であった。ヴォルネーも『紀行』を旅行者に圧倒的な印象を与える事物の列举で始めている。「粗野な音と鋭い喉音で話される言葉が旅行者をぎくりとさせる。……旅行者は、日焼けして口ひげと顎ひげでおおわれた顔、剃った頭に巻かれた布、首から踵まで垂れ下がり、着るというより身体を覆う衣服、6尺もあるパイプ、誰もが手にたずさえる長い杖、革袋で水を運ぶ醜い駱駝、鞍と馬勒をつけ、スリッパを履いた乗り手を軽やかに運ぶロバ、わずかなナツメヤシの実と扁平な丸パンを商う市場、通りをうろつく犬の群れ、一枚布の下から覗く二つの目からしか人間であること分らない痩せ細った幽霊のような女たち、を見る。」（Volney, p.16-17）

これまでのオリエントへの旅行者の多くはこれらの事物に圧倒され、それらが呼び起こす感情に心をゆだねてきた。ヴォルネーの見たところ、『紀行』の少し前に刊行されたサヴァリの『エジプトについての手紙』はその最たるものであった。「娘たちが下着を洗い水を汲むために村からおりてくる。……水瓶と衣服は岸边におかれ、乙女たちはナイルの泥で身体をこすり、河に飛び込み、波に戯れる。……彼女らの編んだ髪は肩の辺りを漂う。乙女たちの肌は濃い褐色で顔は日に焼けているが、大多数の乙女たちの身体はよく成熟している。」（Savary, t.1, p. 69）サヴァリのこの絵画的な描写は彼が感傷に浸っていることを示すものであり、読者をエロチックな感懐に誘うものではある。しかしヴォルネーからすれば、それはけっして現実のナイ

ル河の認識を生み出すものではない。「お許しただかなければならないが、このヨーロッパ人がナイルの水の美しさをほめるつもりであれば、私は彼の無知に笑ってしまう。ヨーロッパ人にとって、ナイルの濁った泥まじりの水には清らかな泉や澄んだ小川のような魅力はまったくない。エジプトの女たちの日に焼け、河の黄ばんだ水をしたたらせた身体は、節制のために感情が昂っているものでなければ、ヨーロッパ人に「水浴する女」を思い出させることはけっしてないだろう。」(Volney, p.25-26)

ピラミッドはその高さや壮大さ、建造の技術などによって旅行者の心を奪い、驚異や賞賛の感情に浸すであろう。しかしヴォルネーはそうした感情に逆らうように、この空しい墓場の建造のために国民全体が長期の過酷な労働を強いられたことを考えると、「この野蛮な労働を命じた専制君主の常軌を逸した行為にたいして憤激を覚える」と書く。反対に、民衆によるピラミッドの盗掘にたいしては、「哲学者はあらゆる美術品の喪失が呼び起こす最初の感情ののちに、民衆に多大の苦痛を与えたものを民衆に返し、無益な贅沢の傲慢さを民衆のもっとも慎ましい欲望に服従させる運命の秘かな正義に味方することを禁じえなかった。」(Volney, p.194)ヴォルネーにとって、ピラミッドは壮麗な遺跡であるよりも専制君主による圧政と搾取の象徴であった。

エジプト・シリアの現状の観察を目指すヴォルネーにとって、ヨーロッパと対照的なオリエントの風物や習慣は好奇心やエキゾチックな感情の対象にとどまることはできなかった。「多くの旅行者にとって、これらの対照的な習慣は奇妙なものでしかない。しかし哲学者にとっては、同じ欲求をもち共通の起源をもつと思われる人間たちの習慣の多様性が何に由来するのかを探究することが関心の対象になる。」(Volney, p.594)この探究のために、ヴォルネーは一切の想像力とロマンチズムをみずからに禁じる。『紀行』が異国の風物の叙情的な描写や冒険物語といった旅行記の魅力を欠いているとすれば、それはエジプトとシリアの現状の観察に徹するために支払わなければならない代償であった。「私は旅行記を書くにあたって事実を検証するさいの精神、すなわち真理への公正な愛を保持することを義務とした。私は多くの読者にたいして幻想がもつ利点を知らないわけではなかったが、想像力による描写をいっさいみずからに禁じた。」(Volney, p.13)

人間とその社会の多様性の考察にあたって、モンテスキューが行なったように、その多様性を生み出す要因を自然的要因と精神的要因に分けて考察するのは、この時代のオーソドックスな方法であった。ヴォルネーもそれに従って自然的状態の観察から書き始める。ただし、自然が人間に及ぼす影響に堪して、モンテスキューよりも進歩した知識をもって、である。モンテスキューにおいては、この点に堪える知識は単純で素朴なものだった。たとえば、「冷たい空気はわれわれの身体の外部の繊維の末端をしめつける」から、寒い風土のもとではひとはより多くの活力をもつ、反対に「暑い空気は繊維の末端を弛緩させる」から、極端な暑さは

身体の活力を失わせ、「この衰弱は精神にまで及ぶだろう」（『法の精神』XIV-2）といった具合である。それにたいして、1776年に設置された王立医学委員会が行なった全国的調査は、風土が健康にたいして及ぼす影響を包括的かつ実証的に明らかにしようとするものだった。医学委員会総書記のヴィック・ダジールは数年来つづいている家畜と人間の疫病に対処するために、都市や村の位置と地形、土壌、水質、風、天候、気温、食物など、疫病の流行に関係すると思われる多数の項目にかんする質問表を全国の医師に送り、回答を求めた。この調査は臨床医学の成立の重要な契機であると同時に、風土の理論の内容を拡大し深めた。他方では、この調査は大気や水質や食物が人間に及ぼす影響を考察したヒポクラテスの理論の再評価をもたらし、生理学の成立を促した。カバニスが生理学にもとづいて『人間の身体と精神の関係』書くのはかなりのちのことだが、生理学が身体と精神の認識をもたらす科学として注目を集めた。ヴォルネーは、1776年から3年間パリで医学を学び、カバニスとの交友を深めるなかで、これらの知識を吸収したにちがいない。

ヴォルネーはこれらの知識を活用しながら、エジプトとシリアの地形、大気、風、水、気温、土壌を住民の健康と生活様式に関係づけながら、観察し記述する。

エジプトの大気は、夏に肉を戸外においておけば腐らずに干し肉になるほど乾燥している。この乾燥した大気が、夏季にはレオミュール寒暖計で25-26度（摂氏31-32度）にもなる暑熱とナイルの氾濫によって三ヶ月も沼沢地と化すこの地の不健康な風土をつぐなう。北風は雨を運んでくるのにたいして、通常三日間も吹き続ける砂漠からの南風は暑く乾燥しており大量の砂の微粒子を含んでいるから、肺に有害である。「避難する場所から遠く離れた道でこの風に襲われた旅行者は不幸だ。彼らはこの風の結果をこうむり、ときには死にいたる。」（Volney, p. 53）エジプトの大気は塩分を多く含んでおり、それがエジプトに特に多く見られる眼疾の原因ではないかとヴォルネーは推測している⁽⁶⁾。

平坦で様なエジプトの地形にたいして、シリアの地形は起伏に富んでいる。シリアは南北に走るレバノン山脈によって地中海沿岸の暑く湿潤で地味の肥えた低地、山岳地帯、山脈の東側の暑く乾燥した地帯に分れ、その気候の相違はきわめて大きい。「海岸地域ではレオミュール寒暖計は25-26度を指すのにたいして、山岳地帯では20-21度（摂氏25-26度）までしか上がらない。……冬期には山々は雪をいただくが、低地ではそんなことはけっしてない。」（Volney, p.236）トリポリでは六月の気温なのに、トリポリから6時間歩いて近く of 山地に行くと三月の気温になる。砂漠と山から吹く風は健康な肺にはよいが、虚弱な肺には有害である。「シリアは異なった気候を同じ空の下に集め、自然が他の地域では大きな時間と空間の隔たりをおいてばらまいた自然の恵みを集めている。」（Volney, p.238）この変化にとんだ気候は、小麦、大麦、胡麻、インディゴ、オリーブなど多くの種類の農産物の生産を可能にする。「現状では、あらゆる活動と勤労の敵である野蛮な政体にもかかわらず、この地方が提供する産物のリスト

は驚くほどである。」(Volney, p.239)

エジプト・シリアの気候の観察と記述の標的はモンテスキューの風土の理論であった。モンテスキューはオリエントの民衆の怠惰と無気力⁽⁷⁾の原因を暑い風土に見出し、この理論はわれわれのあいだで権威をもっている。しかしじっさい暑熱の支配する地方においても、かつてのカルタゴやフェニキアの人民はきわめて活動的だったし、レヴァントの船員や荷担ぎ人夫は「わが国の風土のもとでは見られないほど活発かつ情熱的に働く。」(Volney, p.606) そもそもこの議論は、われわれが冬よりも夏に無気力になることから、暑い風土のもとで暮らす住民は怠惰であるにちがいないと推論することから成り立っている。しかしこの推論においては、「われわれは暑さよりも寒さのほうが勝る国の住民として推論しているのではないか。」反対にアフリカやエジプトの住民は寒さのほうが体液の循環をとどめ、運動を抑えるというだろう。暑いとか寒いとかは習慣に依存し、「身体は、人々が生きる風土に相似した体質を受け取る」(Volney, p.599) のである。こうしてヴォルネーは、モンテスキューの風土論は歴史的事実からしても自然的事実からしても誤っているという。

活動的か怠惰かという問題を考えるには、人間の欲求から出発することが必要だとヴォルネーは主張する。人間には本性上、身体的および精神的欲求が具わっており、活動的か否かは諸欲求を満たす手段の入手の難易にかかっている。一般的にいて、「生存手段の獲得が少しむずかしい地方の住民はより活動的で勤勉である。反対に、自然がすべてを豊富に与える地方では人々は不活発で怠惰である。」(Volney, p.601) そして生活手段獲得においてもっとも根本的なものは土壌の質である。だから人間の気質を考えるには、気温よりも土壌の質を重視すべきだというのである。

それだけでなく、土壌の質は住民の生活様式とそこから生まれる習俗を規定する。土壌の差異は農耕か遊牧かという生活様式の差異を生み、「この生活様式の相違が、たがいに外国人になってしまうほど大きな習俗と特徴の相違を作り出す」(Volney, p.276) からである。砂漠の住民であるベドゥインはその土壌のゆえに遊牧生活を送る。彼らには家畜を養う広大な土地が必要だから、「ある部族やその臣民が他の部族の土地に足を踏み入れれば、盗賊ないし敵として扱われ戦争が起こる。」(Volney, p.287) 彼らはたえず移動し野営する遊牧民は兵士の集団を形成しており、集団のこの性格からして、「法とは首長の命令にほかならず、一人の意志から出て全員一致のものにならなければならない。」(Volney, p.536) このような生活様式が、彼らの統治を独自なものにする。つまり移動や野営には全員の同意が必要だという点では共和的であり、有力な諸家族(シャイク)が部族の指揮を取るという点では貴族政的である。さらに、一人のシャイクが絶対的な権力をもち濫用する場合には専制的であるだろう。彼らの政体は共和政、貴族政、専政の混合政体なのである。

ベドゥインはこのような生活様式に規定されて戦闘的な民族であり、ヨーロッパ人は彼らの

「略奪の精神」を非難してきた。しかし略奪は「敵と見なされた他国者」にたいしてのみ発動されるのであり、略奪が「多くの国民の公法にもとづいている」ことに注意しなければならない。「彼らの社会の内部では、誠実、公平、寛大が支配している。この保護の権利が、あらゆる部族において確立されていることほど高貴なことがあろうか。他国者や敵でさえも、ベドゥインのテントに入ると、彼の人身は不可侵になるのである。正当な復讐も、歓待を犠牲にする場合には、卑怯とされ、永遠の恥辱とされるであろう。」（Volney, p.297）彼らには所有の觀念は存在するが、農耕民の場合のように貪欲や奢侈は存在せず、財産の分配や身分秩序にはある種の平等が見られる。彼らにおいては、貧しさが公的な自由の原因と保証になっており、この自由は宗教的な事柄にまで及んでいる。都市のアラブ人は、「政治的専制と宗教的専制の二重の軛を背負っている」のにたいして、砂漠に生きるベドゥインはこの両方からまったく自由に生きているのである。

ヴォルネーは、ベドゥインのある部族の長アーメドとのつぎのような対話を書き記している。アーメドはヴォルネーに、お前はわれわれの習慣に反感をもっていないし、ベドゥインのように槍をもち馬に乗ることもできるから、われわれのもとにとどまってはどうか、もしとどまるなら、毛皮のコートやテントや雌馬を与え、ベドゥインの正直な若者をつけよう、という。ヴォルネーが、私はキリスト教の教育を受けており、ベドゥインたちは私を不信心者、背教者と考えないだろうかという、アーメドは、「われわれが予言者やコーランを気かけずに暮らしていることをお前は見なかったのか。われわれはそれぞれ良心の示す道に従う。行動は人間の前にあり、宗教は神の前にある」と答えた。ヴォルネーはアーメドの言に見られるベドゥインの歓待と宗教的寛容を感動をこめて記している。「アラブ＝ベドゥインと同じほど優れた道徳心をもつ文明国民はほとんどいないことを認めなければならない。注目すべきことに、同じ美德がトルクメン遊牧民やクルド人にもほとんど同じように見られる。これらの美德は遊牧生活につきものであるようだ。」（Volney, p.299-300）

ところでシリアにおけるベドゥインの生活様式を見ると、彼らの生活様式は土壌の質に応じて異なっている。スエズ、紅海、シリア内陸部の沙漠のような不毛な地域においては、ベドゥイン諸部族間の距離は遠く隔たっており、完全な遊牧生活を送る。ダマとユーフラテスに挟まれたよりよい土壌においては、部族の数は多く部族相互間の距離も隔たっていない。アレppoやガザのような耕作可能な地域では、畑が増えベドゥインの生活様式は半遊牧・半農耕になる。要するに、耕作可能な土地においては、定住の農耕生活がもっとも自然な生活のあり方であり、遊牧から農耕へという変化は文明の進歩なのだ。しかし、シリアの国境地帯やトルクメン人やクルド人の往来の多い地方のように耕作可能な土壌のもとにありながら、放浪＝遊牧生活を送る人々がかなり多く見られる。この遊牧生活は土壌ではなく政治の結果、専制政体の結果にほかならない。「みずからの労働の成果を享受できない国民は、その活動を基本的欲求の

限界のなかに限る。農民は生きるためにしか種を蒔かず、職人は家族を養うためにしか働かない。」(Volney, p.540) 農耕可能な地に住みながら、その地を放棄して放浪生活に入るものはそのもっとも極端な場合なのだ。

こうしてヴォルネーは生活様式と習俗を規定する「土壌の質よりももっと一般的でもっと効果的な理由」を認めなければならないと述べ、それを「政府と宗教と呼ばれる社会制度」に見出す。政府と宗教こそ「諸個人と諸国民の活動力と無気力の真の調整器」(Volney, p.602)であり、エジプト・シリアについていえば、専制とイスラム教こそ住民の貧困と無気力の真の元凶なのである。このことは逆にいえば、沙漠や山岳地帯のように、専制の支配の及びにくい地域においては異なった道徳的状态が見出されるということでもある。ベドウィンが独立と独自の習俗を保持しているのは、彼らが沙漠に住み遊牧生活を送っているからであった。レバノン山地に住むドルーズ族は中央政府からの自立性を保持し、所有権の尊重と宗教的寛容を維持することができた。その結果、痩せた土壌にもかかわらず、彼らの人口は増大している。(Volney, p.342) 住民の活動力は政体の関数なのである。

それではヴォルネーは専制政の成立過程をどのように考えるのか。この点にかんして、ヴォルネーが何ものにもまして注目するのは、エジプト・シリアにおける征服民族と被征服民族の関係である。「われわれのあいだでは、昔の国家の転変の痕跡は日ごとに薄れ、征服者である外国人は被征服者である土着民に近づき、この混淆の結果、もはや同一の利害しかもたない同一の国民集団が形成された。それに反してアジアではほとんどどこでもそうだが、エジプトでは、近時の転変によって征服者である外国人に隷属させられた土着民たちは、利害のまったく異なる混成集団を形成した。」(Volney, p.137) 同一の利害をもつ国民の形成、そこから生まれる公共の利益とそれにもとづく統治というシェーマは啓蒙の政治哲学の根幹をなすが⁽⁸⁾、トルコによるエジプト・シリアの支配はそれとは対蹠的な「征服者の権利」にもとづく支配であった。そこでは征服民族と被征服民族は一つの国民を形成せず、征服民族が文武の要職を独占し、被征服民族は彼らの道具でしかない。そこには公共の利益の観念も主権の観念も存在しないのである。「アラブ人たちは征服することは知っているが、統治することは知らない。」(Volney, p.77)

エジプトの権力を実際に握っているのは13世紀初めにトルコ人によって導入された軍事奴隷の末裔であるマムルーク騎兵だが、彼らを動かしているのは利己的利益、奢侈への欲求だけである。このように金銭のみが人間の動因である社会において、従僕の忠誠を確保しようとすれば、彼らの強欲を満足させて歓心を買う以外にない。そこからあらゆる腐敗とたえざる争乱が生じる。「諸個人の情念が決して一般的目標に向かわず、……首長がいかなる尊敬の感情も植え付けることができず、服従を確保することのできない社会においては、不変の恒常的な状態は不可能である。バラバラになった諸部分の争乱が機構全体に絶え間のない変動を与えざるを

えない。これがカイロのマムルーク社会にいつも起こる事態である。」(Volney, p.113)

このように征服者と被征服者に分かれたエジプト社会には、ヨーロッパに見られるような中間的身分は存在しない。貴族を中核とする中間的権力の存在こそ専制への移行の防ぐ条件だと述べたのはモンテスキューだが、ヴォルネーも同じように「富裕な市民」で構成される中間的身分が政府と人民を結びつけ両者の均衡をもたらすと考える。中間的身分こそ公共の利益にもとづく統治を可能にする存在なのだ。しかしエジプト・シリアには中間的身分は存在せず、人はすべて統治者（軍人、法律家）であるか、それとも人民（農民、職人、商人）のいずれかである。しかも人民は抑圧と闘う手段を奪われている。「マムルークを粉砕ないし改善するためには、農民の広範な同盟が必要だが、その形成は不可能である。抑圧体制が整備されているからである。」各州、各地区には総督が、各村には代官がおかれ、さらに代官は権力をゆだねた何人かの村民によって大衆の動きを監視する。人民の抵抗にたいする抑圧の網の目が完成されているのだ。(Volney, p.138)

ヴォルネーが旅したところ、エジプト社会は危機的状況のさなかにあった。アリ＝ベイの後継者たちのあいだの紛争が無秩序状態を生み出し、カイロに在住するフランスの貿易商人の多くは動乱を避けてカイロを離れた。ペストの流行（1783年）と洪水（1783-84年）が慢性的な貧困をいっそう深刻なものにし、大量のカイロ住民が難を逃れるためにエジプトを去った。ヴォルネーは1785年にシリアのいたるところでエジプトからの難民に出会ったと記している。(Volney, p.135) このような悲惨な状況が、エジプトの未来にかんするヴォルネーの見方をいっそう暗いものにしたにちがいない。

シリアの体制は地方長官（パシャ）が全権を掌握する「純粋な軍事的専制」であるが、その政治構造は基本的にエジプトと同じである。軍隊においては首領の命令は絶対的であるが、命令が伝えられるなかで命令を受けたものが今度は命令者になる。こうして「傲慢と服従の精神」が上から下へと再生産される。「スルタンから地方長官とその下僚たちに委譲される専制権力はこれらの連中の情念を思うままに活動させ、全階級に広まる圧制の動力になった。そしてその結果、農業、工芸、商業、人口、一言でいえば国家の力、すなわちスルタンの力そのものを形づくるすべてのものが、相互作用によって減退することになった。」(Volney, p.540)

このように、エジプト・シリアを支配しているのは軍事的専制と貧困と無知⁽⁹⁾である。「農民がその労苦の果実を享受できないところでは、強制によってしか働かず、農業は衰退する。享受の安全がまったく存在しないところでは、それを生み出す勤勉は存在せず、工芸は幼稚な状態にある。知識が何の役にも立たないところでは、人々は知識の獲得のために何もせず、精神は未開状態にある。これがエジプトの状態である。」(Volney, p.132) シリアにおいても事態はまったく同じである。

イスラム教はエジプト・シリアのこうした状況を正当化するイデオロギー的支柱だ、とヴォ

ルネーは考える。18世紀中頃をさかいに、ヨーロッパの知識人のイスラム教にたいする評価は変化した。世紀の前半には、たとえばヴォルテールに見られるように、イスラム教は宗教的寛容の観点から評価された。それにたいして、世紀後半になると評価はもっと政治的になり、イスラム教が進歩の要因であるか否かが評価の基準になる。(Hafid-Martin, p.115-116) ヴォルネーもこの観点からイスラム教を論じる。イスラム教が権力の穏和な行使や意見の多様性にたいする寛容を説いているとしても、専制政治の害悪を抑制する役割を果たしているとはいいいがたい、とヴォルネーはいう。「イスラム教の精神は統治の濫用を改善するのに適しているどころか、その源泉をなしているということができる。」(Volney, p.551)

『コーラン』の冒頭には「この書にはいかなる疑いの余地もない。これは疑うことなく信じる人々、自ら理解しえないものを信じる人々の導きの書である」と書かれている。『コーラン』の教えは指導者への絶対的服従の教えであり、「服従するもののもっとも盲目的な献身によって、命令するもののもっとも絶対的な専制をうちたてること以外にはない。それがマホメットの目的であった。」(Volney, p.552) 知識にかんしていうと、ヨーロッパにおいては科学は神学から独立して自然法則の探究に向かうのにたいして、オリエントでは知識は神に由来するものであり、探究は神の直接の言葉である『コーラン』を学ぶことである。「人々は『コーラン』の教えを多く学ぶために全生涯を過ごし、知ることに費やさない。」(Volney, p.586) 子供の教育も『コーラン』を読むことを教える教師のところに通うことに限られる。こうして『コーラン』は認識の母である疑問と批判を抑圧し、知識の進歩をさまたげるのである。『コーラン』の教義は「人間の社会的義務や国家の形成や統治術の諸原理、要するに法典を構成する事柄について何も教えない。そこに見出される法律とはといえば、一夫多妻・離婚・奴隷制・相続にかんする四つ五つの規定だけである。」(Volney, p.551) イスラム教は統治の公準をまったく含んでいないのである。さらに、すべてをアラーの思召しとする宿命論を説く『コーラン』から、「善悪にたいする諦観と、後悔と予見への道を閉ざすアパシーが生まれる。」(Volney, p.613-614) こうした諦観は厳しい生活に耐えるうえでは有益だとしても、活動や改革への積極性を抑圧する。こうしてイスラム教は専制、貧困、無知を補強しているというのが、ヴォルネーの評価であった。

エジプト・シリアがこのような状態からみずからを解放する可能性はあるだろうか。ヴォルネーの回答は否である。民衆は反乱を起こすには無知であり、彼らにたいする監視の体制は強力である。支配階級のなかから反乱を起こすものが出たとしても、反乱者自身が専制の精神に囚われて公共の利益を知らないから、勝利したのちには新しい暴君になる。エジプトにおけるアリ＝ベイ、シリアにおけるダエルがそうであった。彼らは非凡な人物だが、彼らの才能は彼らが闘っている悪によってねじまげられた。彼ら自身が暴君になり、政治構造は何も変わらなかったのである。改革の唯一の可能性は啓蒙の普及だが、民衆はそれを望むにはあまりに無知

であり、支配者は自己の地位を危うくするような啓蒙の普及を抑圧するだろう。こうしてヴォルネーは書く。「私はとりわけエジプトの救済には絶望している。」(Volney, p.139)

そうだとすれば、外部からエジプト・シリアを啓蒙し文明化する以外に道はない。ヴォルネーがナポレオンのエジプト遠征にたいして与えた意義はこの点にあった。ナポレオンは農民に土地を与え、相続権を確立し、一夫多妻を禁じる。「一言でいえば、アジアで新しい民法典を打ち立てる。」さらにナポレオンは奢侈を禁じるとともに、土着の産業を活性化する。民衆教育のために初等学校を設立し、アラビア語、フランス語、地理学、数学および精密科学を教える軍官学校を設立する。「一言でいえば、彼は国民を作り出す。」こうしてナポレオンは「往時のアラブ人の力を支配を回復させ、彼らをオスマンの蛮族の軛から解放し、無知な者と不信心者によってゆがめられた予言者の法を純化し、アジアのために偉大さと科学と栄光の新世紀を開くであろう。」(Volney, 1798)

4 外部世界の消滅

このようにヴォルネーは、エジプト・シリアの現状を観察し、その自然的状態と政治的状态を有機的に関連づけてエジプト・シリアの全体像を提示した。『紀行』はそれまでのエキゾチックな描写や断片的な記述にとどまっていたエジプト・シリア像を一変させた。そしてそれが、『紀行』がフランスでも他の西欧諸国でも多くの読者を獲得した理由であった。

ヴォルネーにとって、エジプト・シリアの住民は共感の対象ではなく、観察の対象、研究の対象であった。ヴォルネーは「住民の道徳的状态」を知るには言語の習得と長期の滞在が不可欠だということけれども、それはあくまでも観察の手段としてであった。ヴォルネーは観察する主体、認識する主体であり、エジプト・シリアの住民は一方的に観察と認識の対象であった。しかし、このことはヴォルネーのエジプト・シリア住民の観察が悪意に満ちたものだということを意味するのではない。たとえばヴォルネーは、ヨーロッパ人を魔術によって遺蹟から宝物を奪い去る魔女と見なすエジプト人のヨーロッパ人観は蒙昧な迷信ではあるが、それには根拠があると述べる。さきにふれたように、ヴォルネーはベドゥインの美德に高い評価を与えている。また一般的にいて、オリエントの人々は優れた理解力、強い情熱、特別な道徳感覚をもち、「彼らの諺は彼らが繊細な観察と深い思考を結びつけることができることを示している」(Volney, p.616)と述べる。これらの記述からヴォルネーが客観的な観察の姿勢をとろうとしていることはうかがえる。しかしそのこととは別に、観察の主体と観察の対象の関係は一方的であり、両者を分かち区分線は不動の区分線であった。

しかもヴォルネーは自分が客観的な観察の主体であることに疑いをもたなかった。文明の進歩が人類にとってのもつ意義とヨーロッパ文明の普遍性を疑うことなく確信していたからである。

カバニスの仲介でドルバックとエルヴェシウス夫人のサロンに出入りしていたヴォルネーは、そこで人間が自然界の一員として自然法則に従う存在であり、そのような存在として人間の本性は普遍的であることを学んだ。すべての人間は自己保存のための身体的および精神的欲求をもち、理性をもつ存在として完成化への能力をもっている。この点では、ヴォルネーは人種による差異をまったく認めなかった。そうだとすれば、欲求の充足度の高い社会、完成化の能力の開花に適した社会のほうが、人間の本性に合致した社会であり、優れた社会だということになる。いいかえれば人間の同一性を基礎としながらこの二つの条件によって諸社会の差異が測られる。文明化の程度が諸社会の差異を形づくとされるのである。他方でヴォルネーが、文明化とはヨーロッパで実現の過程にあるものと考えたことはいうまでもない。人間の同一性と文明化がエジプト・シリアの住民の観察を遂行する枠組みであり、観察の主体と観察の対象の不動の区別を可能にしたのである。「観察者とは……さまざまな約束事や限界のシステムに埋め込まれた存在なのである。」(クレリー、21ページ)ヴォルネーが「優越する西洋と劣弱な東洋のあいだに根深い区別を設ける」オリエンタリズムの先駆者(サイド)だとすれば、その根本的契機は、人間の同一性と文明化という観察の枠組みにあったといわなければならない。

啓蒙の知識人は、旅行記を読むことによって、いくつかの外部世界の表象を作り上げた。その一つは、アメリカの未開人についてもたらされた情報にもとづいて作り上げられた「善良な未開人」という表象であり、ヨーロッパの習俗と社会にたいする批判の契機になった。もう一つは、イエズス会士の伝えた中国の政治制度にもとづく「合法的専制」の表象であり、重農学派はそれをもとにフランスの政治改革を構想した。またイスラム世界と中国をもとにして、キリスト教とは対照的な宗教的寛容の表象が形成された。そして最後に、モンテスキューの「東洋的専制」である。それらの表象は認識よりも多分に想像の産物であり、その点が〈哲学者＝旅行家〉によって批判されることになる。しかしそれらはいずれもヨーロッパを外部世界の視点から批判しようとするものであった。これらの表象においては、外部世界はヨーロッパとは根本的に異質な存在としてヨーロッパを映し出す鏡の役割を担ったのである。『ペルシャ人の手紙』のユスベクとリカはそのような外部性のシンボリック的存在であった。

それにたいして、人間の同一性と文明化の観点からすると、外部世界は、異質性よりも同一化の観点から、文明化の程度とその促進の観点からとらえられることになる。外部世界はヨーロッパに働きかける能動的存在であることをやめ、観察の対象、文明化の対象になる。ヴォルネーはエジプト・シリア旅行によって事実の観察にもとづく多くの認識をもたらした。しかしそれは、外部世界の能動的な外部性を消滅させるという代償を払ってのことであった。

- (1) 16巻まではプレヴォの編集で1746-1761年に出版され、17巻以後はションプレらの編集でかなり間隔をおいて刊行された。最終巻の20巻が刊行されたのは共和暦10年（1802年）である。
- (2) もっともブーガンヴィルはルソーにたいする批判を書き記している。「私は旅行者であり船乗りである。ということは、薄暗い書斎のなかで、世界とその住民について際限のない議論にふけり、自然を無理やり彼らの夢に從わせるといった類の怠惰で高慢な著述家の眼から見れば、嘘つきで愚かものということなのだ。」（ブーガンヴィル『世界周航記』21ページ）
- (3) ヴォルネーについては、服部春彦、1988が有益である。
- (4) これはモンテスキューがヨーロッパ旅行のさいにとった方法である。「私はある都市に着くと、必ずもっとも高い鐘楼か塔に登る。部分を見る前に全体を見るためである。そこを離れるときにも同じようにする。自分の考えをまとめるためである。」（Voyages en Europe）
- (5) ゴーミエによれば、ヴォルネーの旅行の旅程は以下の通りである。1783年1月アレクサンドリアに到着。同年2月から7月、カイロ、スエズを旅行。9月末、海路でシリアのジャッファに渡り、サイダ、ラルナカ（キプロス）、アレppoを経て、1784年1月、トリポリに到着し、数ヵ月滞在ののち山間部のマール＝ハナの僧院に行きアラビア語を学習。1784年秋、エルサレム、ベツレヘムを訪れ、1785年1月ガザに戻り、ベドゥインの部族に滞在する。3月初め、アクルから乗船し、アレクサンドリアに短期間滞在ののち、4月半ばにマルセイユの到着。（Gaulmier, p.45）
- (6) ヴォルネーがカイロの街を歩いて出会った100人のうち、20人は盲人、10人は片目、20人の眼は充血し膿をためていた。エジプトではカイロに特に眼疾者が多く、シリアでは眼疾者はエジプトほど多くないが、海岸地域には多く見られる。富裕なものよりも民衆が、ベドゥインよりも農民が多く眼疾に罹り、眼の充血は季節にかかわらず年中見られる。これらの事実から、塩分を多く含んだ大気、チーズ、蜂蜜、葡萄ジャム、青い果物、生野菜を多く食べる食生活、頭髪を剃り布を巻き付けているために頭部からたえず流れ落ちる汗が眼疾の多い原因ではないか、とヴォルネーは推測している。（Volney, p.167-169）この推測が正しいか否かは別として、こうした観察と推論が『紀行』の独自性をなしている。
- (7) サヴァリは、エジプトの住民が欲望や野心をもたず所有しているもので満足して、日がな一日煙草をふかして暮らす生活態度を、ヨーロッパではすでに失われた「明日を思い煩わない生活態度」として憧憬の念をこめて書いている。「彼らの生活はわれわれには長い眠りのように思われ、われわれの生活は彼らには酩酊の連続のように見える。しかしわれわれが逃げ去ってゆく幸福のあとを追って駆けずり回っているのに、彼らは明日のことを思い煩わずに自然が与えるものをおとなしく享受している。」（Savary, 1, p.49）ヴォルネーにとって、サヴァリのこうした評価は幻想にすぎなかった。
- (8) フーコーは、こうした啓蒙の政治哲学にたいしてブーランヴィリエの人種戦争と征服にかんする言説を分析し、歴史理論の展開にとってのその重要性を強調している。（Foucault, M. p.127-147）
- (9) 「無知の根本的原因は、知識の普及を監視するだけでなく、知識を窒息させるのに適したあらゆることを行なっている政府にある」（Volney, p.591）が、その直接的な原因は、教育の手段である書物の不足である。ヴォルネーはシリア全土でマール＝ハンナの僧院とジュッザールの二つの図書館しか存在せず、いずれもごくわずかの蔵書しか有しないと述べている。（Volney, p.587）書物の不足の原因は、オリエントでは印刷術が未発達ですべての書物が手書きであることにある。チュルゴやコンドルセと同じく、ヴォルネーにとっても、印刷術は文明の進歩の最大の要因であった。

引用文献

- Althusser, L.: *Lire le Capital*, t.1. 1965, Paris.
- Boulanger, N.: *Recherches sur l'origine du despotisme oriental*, 1763, Paris.
- Cabanis, P.-J.G.: *Œuvres philosophiques de Cabanis*, éd. Lehec, C. et Cazeneuve, J. 2 vol. 1956, Paris.
- Diderot, D.: *Voyage de Hollande*, 1774, *Œuvres de Diderot*, éd. Asézat, J. et Tourneux, M. t.17., 1876, Paris.
- Dodds, M.: *Les récits des voyages, sources de l'Esprit des Lois de Montesquieu*, 1929, réimp. Slatkin, 1980, Paris.
- Duchet, M.: *Anthropologie et histoire au siècle des Lumières*, 1995, Paris.
- Foucault, M.: *Il faut défendre la société*, 1997, Paris.
- Gaulmier, J.: *Un grand témoin de la Révolution et de l'Empire*, 1959, Paris.
- Hafid-Martin, N.: *Voyage et connaissance au tournant des Lumières (1780-1820)*, *Studies on Voltaire and the 18th Century*, 334, 1995, Oxford.
- Martin-Allanic, J.-E.: *Bougainville, navigateur et les découvertes de son temps*, 2 vol., 1964, Paris.
- Moravia, S.: *Philosophie et géographie à la fin du 18^e siècle*, *Studies on Voltaire and 18th Century*, 57, 1967, Genève.
- Abbé Prevost: *Histoire des voyages*, 20 vol. 1746-1802, Paris.
- Savary, C.-L.: *Lettres sur l'Égypte*, 1785-1786, Paris.
- Tucker, J.: *Instructions for Travelers.*, 1757, London.
- Volney, C.-F.: *Voyage en Syrie et Égypte*, 1787, *Œuvres de Volney*, t.3., 1998, Paris.
- Volney, 1798: *Sur Bonaparte*, *Moniteur*, t.29, p.492.
- Voltaire: *Essai sur les mœurs*, éd. R. Pomeau, 1963, Paris.
- アザール, P.: 『ヨーロッパ精神の危機』(野沢協訳), 1978, 法政大学出版局
- クレーリー, J.: 『観察者の系譜』(遠藤知己訳), 1997, 十月社
- 服部春彦: 「ヴォルネーのオリент観」, 『空間の世紀』(樋口謹一編), 1988, 筑摩書房
- ブーガンヴィル, L.-A.: 『世界周航記』(山本淳一訳), 1990, 岩波書店
- モンテーニュ: 『エッセー』(原二郎訳), 1965, 岩波文庫
- ルソー: 『人間不平等起源論』(原好男訳), 『ルソー全集』第4巻1978, 白水社
- ルソー: 『エミール』(樋口謹一訳), 『ルソー全集』第7巻1978, 白水社